

## 勤労世代の暮らし向きへの苦しさ：所得・健康・ソーシャルサポートとの関連に関する分析

白瀬 由美香

### I はじめに

暮らし向きが「良い」や「悪い」、あるいは「ゆとりがある」や「ゆとりがない」という言い方がしばしばなされるが、これらは一般の人々が自らの生活をいかに評価しているかを表している。暮らしの質、すなわち生活の質（quality of life）を測る試みは、様々な研究者によって繰り返し論じられてきた（濱島, 1994; 三重野, 1990; Neugarten, 1961; Stiglitz et al., 2010など）。暮らし向きに対する意識とは、生活の質や豊かさ、満足度を構成する指標の1つとして知られている（佐野, 2008; 佐野, 2009; 三重野, 2012）。

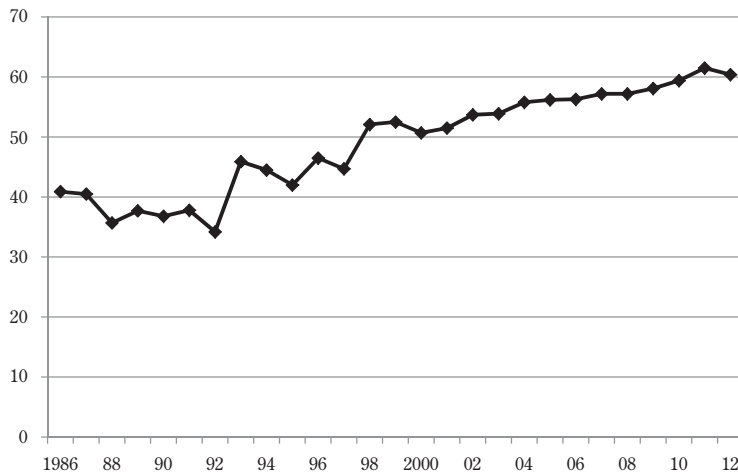
佐野（2008）は、「暮らし向き満足度」は経済力の格差を直接的に表すのではなく、過去や他人と比べて相対化された経済力の評価によって左右されることを指摘している。また、三重野（2012）は、生活をめぐる意識の連関について主成分分析を行い、「現在の暮らし向き」に関する意識が、「今後の暮らし向き」や「日本社会の将来へのポジティブな見通し」、「公平感」、「満足感」に関する指標と近い位置にあるものだとしていた。これらの知見から考えるに、研究者が測定しようとしてきた暮らし向きとは、少なくとも家計の経済状況や所得の金額をそのまま反映したものではないものとして捉えられてきたことが見て取れる。

厚生労働省が毎年実施している「国民生活基礎調査・所得票」には、「現在の暮らしの状況を総合的にみて、どう感じていますか」という設問がある。設問は、「大変苦しい」「やや苦しい」「普通」

「ややゆとりがある」「大変ゆとりがある」の5つの選択肢から世帯主の意識を回答するようになっている。図1は、回答のうち「大変苦しい」または「やや苦しい」を合わせて「苦しい」とした者の比率がどのように変化してきたかを示している。データが入手可能な1986年から2012年までの推移を見ると、1980年代後半には「苦しい」という回答は30%台にすぎなかったが、1992年に期間中でもっとも低い34.2%を記録し、その後上昇をつづけている。2000年代以降も暮らし向きが「苦しい」人の比率は増え続け、2011年には61.5%に達した。この調査結果からは、国民の半数を超える人々が多かれ少なかれ生活に何らかの困難感を持っているのだと読み取れる。

国立社会保障・人口問題研究所が2012年に実施した「生活と支え合いに関する調査」においても、現在の暮らし向きの意識に関して、対象となったすべての世帯員に調査を行っている。その集計結果によれば、回答者の約4割が現在の暮らし向きを「やや苦しい」または「大変苦しい」としており、特に30歳代から50歳代の無職男性は、「苦しい」という割合が高いことが示されている。

「生活と支え合いに関する調査」では、「現在の暮らし向き」とは「現在および今後しばらくの間続くとと思われる暮らしの経済状況、生活の様子」に関する意識を表すものと定義している（国立社会保障・人口問題研究所, 2013）。しかしながら、いくつかの研究が示すように、暮らし向きには多様な要素が影響を及ぼしている可能性があり、単純に経済状況を表す指標であると見なすことはできない。本論文では、「生活と支え合いに関する



出所) 厚生労働省「国民生活基礎調査」(各年度)をもとに作成。

図1 暮らし向きが「苦しい」と回答した人の比率の推移

調査]のデータを用いて、現在の暮らし向きが「苦しい」という自己評価は、何と関連しているのかを検証していく。

## II 暮らし向き意識の関連要因に関する先行研究

暮らし向きの「ゆとり」や「苦しさ」、生活の満足度などが言及された研究を整理すると、主に所得、健康、ソーシャルサポートとの関連が論じられてきた。はじめに暮らし向きとこれら3つの点に関連する先行研究を整理しておこう。

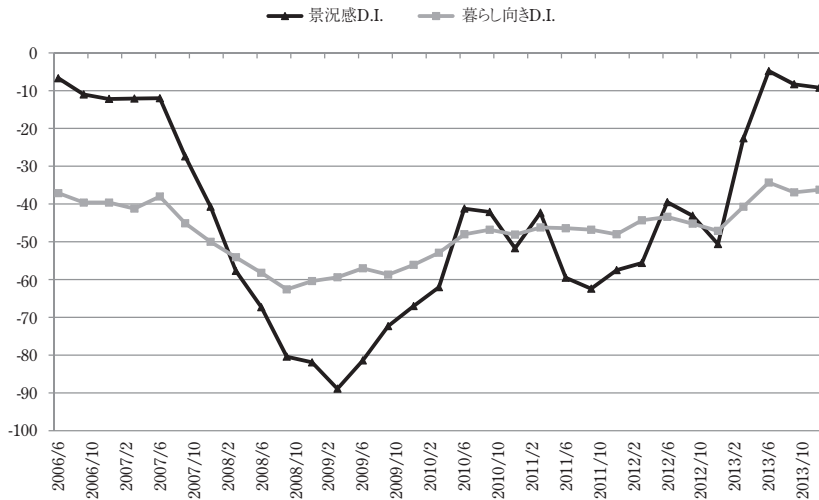
まず、暮らし向き意識と所得との関係である。暮らし向きには所得の多寡が反映されているのだろうか。白波瀬・竹内(2009)が国民生活基礎調査・所得票を用いて行った分析は、暮らし向き意識には、所得との明確な関係がみられる。それ以外にも、暮らし向きには世帯人数の多さ、離婚などが影響している。さらに賃金プロファイル上では最も恵まれた年齢層と思われる40歳代、50歳代において、暮らしが「苦しい」という意識が高くなることが指摘されている。暮らし向きには「自ら手にする所得の大きさもさることながらそれ以外の要素、たとえばマクロな経済状況や将来のみとおし」(白波瀬・竹内, 2009, p.274)なども反映

されている可能性があるという。

三重野(2012)も、現在の暮らし向きの説明要因について検討を行っている。具体的には、性別・年齢・職業その他・学歴・地域・世帯構成・住居・支持政党の8つの要素との関連を分析している<sup>1)</sup>。その結果、現在の暮らし向きには、職業その他・学歴・世帯構成が大きく関与し、年齢・性別・住居がそれに続くことが示されていた。

このように暮らし向き意識には、所得の大きさだけでなく、人々が暮らしの中で感じる様々な要因が影響を及ぼしていることが推察される。ただし、日本銀行が四半期ごとに実施している「生活意識に関するアンケート調査」結果によれば、1年前と比べた暮らし向きの変化に関する意識は、景気変動に関する「景況感」の動きに対して、図2の通り経時的な変動幅が小さい<sup>2)</sup>。すなわち、白波瀬・竹内(2009)が指摘したように、暮らし向き意識はマクロ経済の状況を反映している可能性はあるものの、景況感よりは安定した意識であるということにも留意しておく必要があるだろう。

近年、社会経済状態と健康状態の関係について、国際的にも関心が高まっている(WHO, 2012; Marmot & Wilkinson, 2005)。日本においても、高齢者に関する研究を中心として、実証研究が蓄



注1) 景況感D.I.=「良くなった」-「悪くなった」。

2) 暮らし向きD.I.=「ゆとりが出てきた」-「ゆとりがなくなってきた」。

出所) 日本銀行「生活意識に関するアンケート調査」(第26～56回)をもとに作成。

図2 景況感D.I.と暮らし向きD.I.の推移

積されつつあり(近藤, 2007), 暮らし向きなどの社会経済状態と健康との関係についても検証が進められている。

藤原ら(2012)の研究は, 心理的な健康指標が所得と関連していることを指摘する。重要なポイントは, 藤原ら(2012)が, 所得との関係以上に暮らし向きを示す意識指標との関連のほうが強いことが示されていることにある。また坊迫と星(2010)が行った等価収入と幸福感・生活満足感・主観的健康観の構造分析によれば, 主観的健康観は生活満足度や幸福感を介して間接的に等価収入と関連しているという。一般的な暮らし向きの分析に加えて, 家族介護者のストレスに関する男女差を検証した研究では, 女性介護者の暮らし向きが身体的・社会的なストレスと有意な関係にあるとの結果が出ている(山田他, 2006)。2007年「社会保障実態調査」を用いて暮石(2011)が退職者に関して行った分析では, 10年前と比べて健康状態が良くなっている場合には暮らし向きは高くなり, 反対に悪くなっている場合には暮らし向きも低くなることが示されていた。

さらに, 暮らし向きはソーシャルサポートの入手可能性とも関連しているという(和気, 2007)。

ソーシャルサポートとは, 有害なライフイベントの影響を緩和し, 良好なメンタルヘルスの維持を可能にするものとして1970年代にCasselによって提唱され, 人々に有益な効果を有する対人的要因として, 心理学をはじめ多様な研究分野で検証が行われてきた(稲葉, 2007)。ソーシャルサポートは, 個人の健康や心理状態に影響をもたらすことから, その作用の仕方によっては, 将来への不安を軽減することもあれば, 高めることもある。実際, 高齢者を対象に行われた研究によれば, ソーシャルサポートが多い者ほど主観的な幸福感や生活満足度が高いという結果が出ている(杉澤, 1993; 金, 2000; 岩佐, 2011)。ソーシャルサポートを通じて形成される人々の安心感や不安感は, 生活の「ゆとり」や「苦しさ」という意識にも影響しうる要因の1つと考えられる。

このように先行研究では, 暮らし向きが単純に所得との関係が強いだけではなく, 健康やソーシャルサポートという変数とも関係があることが示されてきた。本分析は, 「生活と支えあいに関する調査」の調査データを使用して, これまで指摘された変数との関係を改めて確認することにした。さらに一般的な暮らし向きの分析に加えて,

就業者および雇用者に分析対象を限定した分析を行う。一般的な暮らし向きに比べて、就業者および雇用者は、暮らし向きが比較的安定していると思われ、所得あるいは健康変数との関係はより密接になると考えられる。先行研究との関係から、これらの事実確認は重要な要件であると考えられる。

### Ⅲ データの特性と分析の手続き

#### 1 データ

国立社会保障・人口問題研究所が2012年に実施した「生活と支え合いに関する調査」を用いる。この調査は、厚生労働省が2012年に実施した「国民生活基礎調査」で設定された調査地区（1102地区）より無作為に抽出した300地区内のすべての世帯主および20歳以上の世帯員を対象としている。調査票は、世帯票（有効票数11,000票、有効回収率68.3%）と個人票（有効票数21,173票、有効回収率80.6%）からなり、「生活と支え合いに関する調査」の情報は、「国民生活基礎調査」から得られた世帯員情報との突合が可能である<sup>3)</sup>。本論文では、統計法第32条に基づく調査票情報の目的外使用申請によって得られた「国民生活基礎調査」の個票データから、婚姻状況、学歴、現在の職業などの情報を「生活と支え合いに関する調査」結果に追加して分析を行う。分析対象とするのは、20歳以上59歳未満の勤労世代の者のうち教育機関に在学中でない者（11,391人）である<sup>4)</sup>。

#### 2 変数

本論文が明らかにするのは「現在の暮らし向き」とⅡ節で指摘した変数との関係である。「生活と支え合いに関する調査」では「現在の暮らし向き」を「現在のあなたの暮らし向きについておたずねします。もっともあてはまるものに1つ○をつけてください。」という設問で確認している。回答は「大変ゆとりがある」「ややゆとりがある」「普通」「やや苦しい」「大変苦しい」の5つの選択肢から1つを選ぶ形式である。サンプル全体の構成比を見ると、「大変ゆとりがある」と回答した者は1.0%に過ぎず、「ややゆとりがある」は9.6%、

「普通」が46.2%、「やや苦しい」が28.8%、「大変苦しい」が12.2%、無回答が2.1%であった。本論文では、暮らし向きが「やや苦しい」および「大変苦しい」をまとめた「苦しい」者を1、「大変ゆとりがある」「ややゆとりがある」「普通」を0とする2値の変数として、その分布の分析と、変数間の関係をモデル化した二項ロジスティック回帰分析を行う。

用いる変数は、Ⅱ節で示したように、1)所得、2)主観的健康観、3)ソーシャルサポートの有無の3つである。以下ではそれぞれの取り扱いについて説明する。

所得は等価世帯所得階級を用いる。等価世帯所得階級は、各世帯の20歳以上の世帯員の年間所得（税込み）の合計値を世帯所得として、それを世帯人員数で除した値をほぼ均等に10階級に区分した。その区分をもとに、もっとも所得の小さい第1所得階級を基準変数としてダミー変数を作成した。所得階級を区分する際には、「生活と支え合いに関する調査」のすべてのサンプルをもとに10階級を作成した。そのため本論文の分析に用いる等価世帯所得階級は、勤労世代の中での相対的な位置ではなく、すべての調査回答者の所得分布全体における位置を示すものとして捉えられる。

主観的健康観は、「良い」「まあ良い」「普通」「あまり良くない」「良くない」の5つの選択肢から1つを選ぶ設問から得られた回答を用いる。回答の構成比をみると、「良い」25.7%、「まあ良い」22.1%、「普通」38.8%、「あまり良くない」9.6%、「良くない」1.5%となっている。本論文では、各選択肢を選んだ者を1、選ばなかった者を0とするダミー変数を作成し、健康状態が「普通」である者と比較した場合の暮らし向きとの関連を分析するのに用いる。

ソーシャルサポートの種類には多様な分類がある。中でも、ケアや金銭などの実体的な援助を指す「手段的サポート」と、情緒や感情に働きかける援助を指す「情緒的サポート」がよく知られている（野口, 1991; 岩佐, 2011）。本論文ではソーシャルサポートを表す変数として、手段的サポートである「看病や介護、子どもの世話」、い

ざという時の高額のお金の援助」, 情緒的サポートである「愚痴を聞いてくれること」を用いて変数を作成した。これらの設問に対して, 「頼れる人はいない」と回答した人を1とするダミー変数を作成し, ソーシャルサポートの欠如が暮らし向きの「苦しさ」をどの程度高めるのかを検証する。

統制変数は, 個人の属性を示す変数を用いた。「生活と支え合いに関する調査」から「性別」, 「年齢 (10歳階級)」, 「世帯内の子どもの有無」の3つを, 「国民生活基礎調査」から「婚姻状態」, 「学歴」, 「仕事の有無」, 「就業状態」, 「勤め先での呼称」の5つを用いる。いずれもダミー変数として投入する。白波瀬・竹内 (2009) や三重野 (2012) の分析によると, 夫婦のみの世帯は生活が安定的であり, 世帯人員数の多さが生活の不安定化要素となり得ると示唆されていたことから, 本研究では世帯の特徴を表す変数として, 世帯内の20歳未満の子どもの有無に関するダミー変数を投入した。「婚姻状況」は, 「配偶者あり」, 「未婚」, 「死別」, 「離別」の4区分, 「学歴」は, 「小中学校卒」, 「高校卒」, 「専門学校卒」, 「短大高専卒」, 「大学卒」, 「大学院卒」の6区分からなる。

「仕事の有無」では「仕事あり」とした者には, 主に仕事をしている者だけでなく, 家事や通学のかたわら収入を伴う仕事を少しでもした者がすべて含まれる。学生を除く勤労世代を分析対象とするため, 「仕事なし」のうち「通学のみ」の者は除外している。さらに仕事のある者については, 「自営業」, 「雇用者」, 「会社・団体等の役員」, 「その他」の分類に基づいて「就業状態」を統制する。また, 「雇用者」については, その内訳を「正規職員」, 「パート」, 「アルバイト」, 「派遣社員」, 「契約社員・嘱託」, 「その他」に分類し, それぞれダミー変数を作成して分析を行う。

### 3 分析方法

はじめに, 所得, 主観的健康観およびソーシャルサポートに関する変数と, 暮らし向きとの2変数間の関連についてクロス集計表で確認をする。

次に, 個人属性を統制した上で, 勤労世代の生活困難感に所得, 主観的健康観, ソーシャルサポー

トが及ぼす独立した関連を明らかにするため, 暮らし向きを被説明変数とするロジスティック回帰分析を行う。まず, 性別, 年齢, 婚姻状態, 世帯内の子どもの有無, 学歴, 仕事の有無や働き方などを統制して, 所得のみ (モデル1), 主観的健康観のみ (モデル2), ソーシャルサポートのみ (モデル3) をそれぞれ投入する。そして, これら3つの説明変数を同時に投入して, 関連の大きさを検証する (モデル4)。さらに, 就業状態や正規雇用・非正規雇用の違いを統制した場合に, 所得・主観的健康観・ソーシャルサポートが暮らし向きにどのくらい影響を及ぼすのかについて, 就業者 (モデル5) および雇用者 (モデル6) にそれぞれサンプルを限定した分析を行う。

## IV 分析結果

### 1 暮らし向きと所得・健康・ソーシャルサポートの関係

図3～5は, 暮らし向きと所得, 健康, ソーシャルサポートとの関係を示したものである。Ⅲ-2で確認したように, 暮らし向きに「大変ゆとりがある」と回答した者が極めて少ないことを踏まえ, ここでは「大変ゆとりがある」と「ややゆとりがある」をまとめて「ゆとりがある」とし, 「やや苦しい」と「大変苦しい」を「苦しい」として示している。

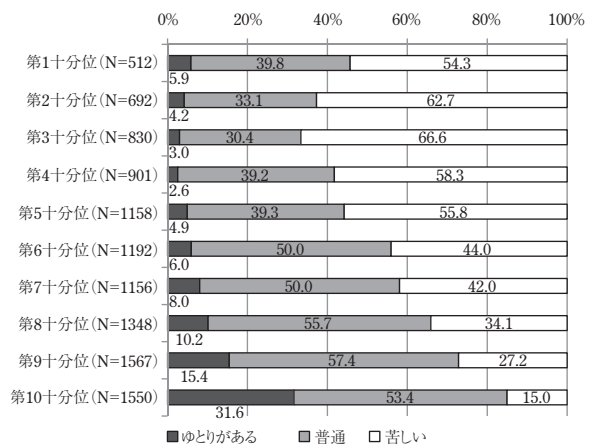


図3 暮らし向きと等価世帯所得

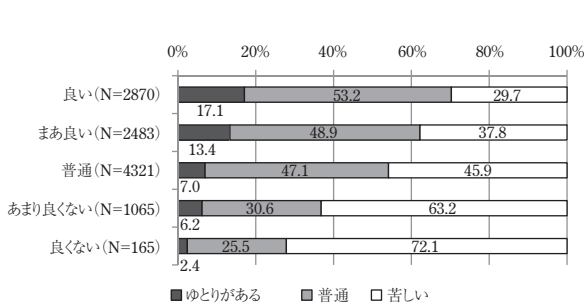


図4 暮らし向きと主観的健康観

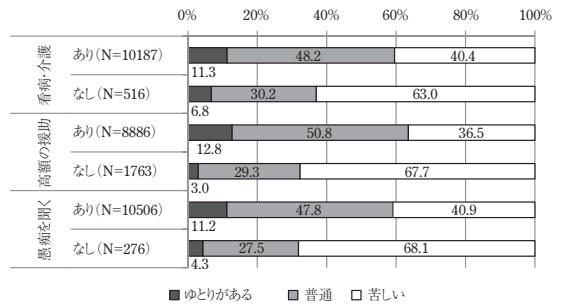


図5 暮らし向きとソーシャルサポート

表1 個人属性別に見た暮らし向きが「苦しい」の度数と割合

|         | 総数    | 暮らし向きが「苦しい」 | %    |
|---------|-------|-------------|------|
| 総数      | 11155 | 4675        | 41.9 |
| 性別      |       |             |      |
| 男性      | 5459  | 2374        | 43.5 |
| 女性      | 5696  | 2301        | 40.4 |
| 年齢      |       |             |      |
| 20歳代    | 1664  | 536         | 32.2 |
| 30歳代    | 3018  | 1242        | 41.2 |
| 40歳代    | 3325  | 1505        | 45.3 |
| 50歳代    | 3148  | 1392        | 44.2 |
| 配偶状況    |       |             |      |
| 有配偶     | 7453  | 3173        | 42.6 |
| 未婚      | 3037  | 1107        | 36.5 |
| 死別      | 116   | 58          | 50.0 |
| 離別      | 549   | 337         | 61.4 |
| 世帯内の子ども |       |             |      |
| あり      | 6246  | 2419        | 38.7 |
| なし      | 4909  | 2256        | 46.0 |
| 学歴      |       |             |      |
| 小中学校卒   | 632   | 406         | 64.2 |
| 高校卒     | 4552  | 2208        | 48.5 |
| 専門学校卒   | 1522  | 629         | 41.3 |
| 短大高専卒   | 1392  | 500         | 35.9 |
| 大学卒     | 2720  | 848         | 31.2 |
| 大学院卒    | 250   | 47          | 18.8 |
| 仕事      |       |             |      |
| あり      | 9086  | 3702        | 40.7 |
| なし      | 2069  | 973         | 47.0 |
| 就業状態    |       |             |      |
| 自営業     | 1001  | 498         | 49.8 |
| 雇用者     | 7109  | 2831        | 39.8 |
| 会社・団体役員 | 742   | 257         | 34.6 |
| その他     | 215   | 106         | 49.3 |
| 雇用形態    |       |             |      |
| 正規職員    | 4914  | 1686        | 34.3 |
| アルバイト   | 1298  | 691         | 53.2 |
| パート     | 319   | 176         | 55.2 |
| 派遣社員    | 154   | 80          | 51.9 |
| 契約社員    | 371   | 174         | 46.9 |
| その他     | 52    | 23          | 44.2 |

等価世帯所得階級別に暮らし向きを見ると、「苦しい」と回答した人の比率が最も高いのは第3十分位で66.6%あり、第2十分位が62.7%でそれに続く。第1分位から第3分位までは生活困難感をもつ割合がとくに高い。第4十分位以上では、所得が高くなるほど暮らし向きが「苦しい」人の割合が低くなり、生活にゆとりのある人の割合が高くなる。第10十分位では「苦しい」とした人は15%に

すぎず、もっとも所得階級が高いことを反映して、「ゆとりがある」とした人は31.6%にのぼった。

主観的健康観別では、健康状態が「良い」から「良くない」に移るにつれて、「ゆとりがある」や「普通」という人の割合が少なくなり、「苦しい」とする人の割合が高くなる。健康状態が「良い」では、生活困難感のある人が29.7%しかいないのに対して、「あまり良くない」では63.2%、「良く

ない」では72.1%になる。

ソーシャルサポートについても、「頼れる人がいない」という人は、誰かしら頼れる人がいる場合よりも、暮らし向きの苦しい人の割合が大幅に高くなる。いずれのサポートについても頼れる人がいる場合は、「苦しい」と感じているのは4割前後にとどまる。それに対して、「看病や看護、子どもの世話」で頼れる人がいないと、63.0%が「苦しい」と回答している。「高額のお金の援助」で頼れる人がいない場合は、「ゆとりがある」のはわずか3%に過ぎず、「苦しい」が67.7%である。同様に「愚痴を聞いてくれる」人がいない場合には、それぞれ4.3%、68.1%である。3つの変数の各分布状況はどれも暮らし向きと正の関係があることを示唆している。

表1は、個人属性別に暮らし向きが「苦しい」とした人の割合を示している。性別を見ると、男性43.5%、女性40.4%であり、男性のほうがやや高い傾向がある。20歳代に比べると30歳代以上で生活困難感が高まっていき、学歴は高いほど生活困難感の割合は低くなる。婚姻関係をみると、「苦しい」とした人が過半数を超えているのは、「死別」50.0%、「離別」61.4%であり、学歴では「小中学校卒」64.2%、就業形態では「アルバイト」53.2%、「パート」55.2%、「派遣社員」51.9%であった。

## 2 勤労世代の暮らし向きの苦しさに関連する要因

表2は、勤労世代の暮らし向きの苦しさに関して、ロジスティック回帰分析によって推定された係数と標準誤差、オッズ比を示している。まず、個人属性を統制した上で、等価世帯所得が暮らし向きの苦しさに及ぼす効果を見たのがモデル1である。もっとも所得の低い階級である第1十分位を基準とすると、第2十分位から第4十分位までの低所得層では「苦しい」と感じる傾向が有意に大きく、そのリスクは第3十分位で最大の1.67倍となる。第5十分位でも有意ではないとはいえ、「苦しい」と感じる傾向は大きい。第6十分位になると、生活困難感のリスクは0.69倍になり、所得階級が

高いほど小さくなっていく。第10十分位は第1十分位と比べて0.16倍も暮らし向きが苦しくなるリスクが小さい。

モデル2では、主観的健康観が暮らし向きの苦しさに及ぼす効果を検証した。主観的健康観が「普通」である状態を基準とすると、「良い」では0.51倍、「まあ良い」では0.74倍有意にリスクが小さい。それに対して、「あまり良くない」では1.96倍、「良くない」では2.62倍有意に大きくなる。このモデルにおいて婚姻状態を見ると、「離別」の場合は配偶者がいる場合と比べて、暮らし向きを苦しく感じるリスクが1.98倍になることがわかる。

モデル3では、ソーシャルサポートに関する3つの変数を投入した。手段的「看病や介護、子どもの世話」で頼れる人がいないと1.50倍、「高額のお金の援助」では3.09倍も生活困難感が高まる。「愚痴を聞いてくれる」人がいない場合は、有意ではないが、リスクは1.23倍となる。個人属性に関してはモデル2と同様に、ここでも「離別」は生活が苦しくなるリスクを高めているが、「未婚」、「死別」は有意ではなかった。

以上のすべての説明変数を同時に分析したのがモデル4である。所得階級の違い以上に暮らし向きの苦しさに大きな影響を与えているのは、不健康や手段的サポートの欠如である。主観的健康観が「あまり良くない」と1.92倍、「良くない」と2.30倍、「高額のお金の援助」で頼れる人がいないと2.58倍リスクが高い。所得については第5十分位を除いていずれも有意であるが、第1十分位と比較して最も高いのが第3十分位であり、1.75倍生活困難感を持つ傾向がある。なお、第5十分位までは係数の符号が正であり、第6十分位以上は負となって、所得が高くなるとリスクは低くなっている。

モデル1からモデル4まですべてに共通して、男性は女性に比べて1.3倍程度暮らし向きが苦しいと感じる傾向がある。また、モデル2、モデル3では、世帯内に20歳未満の子どもがいることは、生活困難感のリスクを有意に高くしていた。とりわけソーシャルサポートとの関連を見たモデル3において、世帯内に子どもがいる場合にそのリスク

表2 勤労世代の暮らし向きに関するロジスティック回帰分析の結果

|                       | モデル1      |           |           | モデル2   |           |           | モデル3   |           |           | モデル4   |           |           |
|-----------------------|-----------|-----------|-----------|--------|-----------|-----------|--------|-----------|-----------|--------|-----------|-----------|
|                       | B         | 標準誤差      | Exp (B)   | B      | 標準誤差      | Exp (B)   | B      | 標準誤差      | Exp (B)   | B      | 標準誤差      | Exp (B)   |
| 等価世帯所得<br>(基準：第1十分位)  | 0.327     | 0.123 **  | 1.386     |        |           |           |        |           |           | 0.353  | 0.138 *   | 1.423     |
| 第3十分位                 | 0.514     | 0.119 *** | 1.672     |        |           |           |        |           |           | 0.556  | 0.134 *** | 1.745     |
| 第4十分位                 | 0.193     | 0.116     | 1.213     |        |           |           |        |           |           | 0.275  | 0.130 *   | 1.316     |
| 第5十分位                 | 0.102     | 0.111     | 1.107     |        |           |           |        |           |           | 0.217  | 0.125     | 1.242     |
| 第6十分位                 | -0.374    | 0.111 *** | 0.688     |        |           |           |        |           |           | -0.245 | 0.124 *   | 0.783     |
| 第7十分位                 | -0.459    | 0.112 *** | 0.632     |        |           |           |        |           |           | -0.372 | 0.125 **  | 0.690     |
| 第8十分位                 | -0.764    | 0.111 *** | 0.466     |        |           |           |        |           |           | -0.610 | 0.124 *** | 0.544     |
| 第9十分位                 | -1.070    | 0.110 *** | 0.343     |        |           |           |        |           |           | -0.928 | 0.123 *** | 0.395     |
| 第10十分位                | -1.808    | 0.120 *** | 0.164     |        |           |           |        |           |           | -1.636 | 0.133 *** | 0.195     |
| 主観的健康観<br>(基準：普通)     |           |           |           | -0.669 | 0.054 **  | 0.512     |        |           |           | -0.565 | 0.059 *** | 0.568     |
| まあ良い                  |           |           |           | -0.298 | 0.053 *** | 0.742     |        |           |           | -0.217 | 0.059 *** | 0.805     |
| あまり良くない               |           |           |           | 0.672  | 0.073 *** | 1.958     |        |           |           | 0.651  | 0.081 *** | 1.917     |
| 良くない                  |           |           |           | 0.963  | 0.181 *** | 2.619     |        |           |           | 0.834  | 0.206 *** | 2.302     |
| サポートなし<br>(基準：サポートあり) |           |           |           |        |           |           | 0.408  | 0.112 *** | 1.504     | 0.390  | 0.122 **  | 1.477     |
| 看病・介護<br>高額の援助        |           |           |           |        |           |           | 1.127  | 0.061 *** | 3.087     | 0.947  | 0.065 *** | 2.578     |
| 慰撫を聞く                 |           |           |           |        |           |           | 0.208  | 0.155     | 1.231     | 0.036  | 0.166     | 1.036     |
| 性別 (基準：女性)            | 0.293     | 0.047 *** | 1.340     | 0.000  | 0.512 *** | 1.306     | 0.265  | 0.047 *** | 1.304     | 0.282  | 0.051 *** | 1.325     |
| 年齢                    | 0.214     | 0.073 **  | 1.239     | 0.000  | 0.742 **  | 1.262     | 0.178  | 0.074 *   | 1.195     | 0.097  | 0.078     | 1.102     |
| 30歳代                  | 0.458     | 0.074 *** | 1.580     | 0.000  | 1.958 *** | 1.309     | 0.238  | 0.075 **  | 1.269     | 0.213  | 0.080 **  | 1.238     |
| 40歳代                  | 0.476     | 0.081 *** | 1.610     | 0.000  | 2.619 **  | 1.286     | 0.252  | 0.082 **  | 1.286     | 0.167  | 0.089     | 1.181     |
| 50歳代                  | -0.225    | 0.066 *** | 0.799     | -0.018 | 0.063     | 0.982     | -0.056 | 0.066     | 0.945     | -0.379 | 0.072 *** | 0.685     |
| 未婚                    |           |           |           | 0.200  | 0.201     | 1.222     | 0.140  | 0.211     | 1.150     | -0.344 | 0.229     | 0.709     |
| 死別                    | -0.241    | 0.208     | 0.786     | 0.682  | 0.098 **  | 1.978     | 0.631  | 0.102 *** | 1.880     | 0.252  | 0.111 *   | 1.286     |
| 離別                    | 0.384     | 0.101 *** | 1.468     | 0.419  | 0.052 *** | 1.520     | 0.382  | 0.054 *** | 1.465     | 0.099  | 0.059     | 1.104     |
| 子どもがいる世帯              | 0.013     | 0.055     | 1.014     | -0.521 | 0.092 *** | 0.594     | -0.546 | 0.098 *** | 0.579     | -0.282 | 0.105 **  | 0.754     |
| 学歴                    | -0.370    | 0.095 *** | 0.691     | -0.736 | 0.103 *** | 0.479     | -0.709 | 0.109 *** | 0.492     | -0.372 | 0.116 **  | 0.689     |
| 高校卒                   | -0.531    | 0.106 *** | 0.588     | -0.934 | 0.106 *** | 0.393     | -0.910 | 0.112 *** | 0.403     | -0.469 | 0.119 *** | 0.607     |
| 専門学校卒                 | -0.693    | 0.109 *** | 0.500     | -1.201 | 0.097 *** | 0.301     | -1.199 | 0.103 *** | 0.301     | -0.672 | 0.110 *** | 0.511     |
| 短大高専卒                 | -0.833    | 0.100 *** | 0.435     | -1.860 | 0.188 *** | 0.156     | -2.000 | 0.195 *** | 0.135     | -1.305 | 0.205 *** | 0.271     |
| 大学院卒                  | -1.418    | 0.192 *** | 0.242     | -0.190 | 0.056 *** | 0.827     | -0.242 | 0.057 *** | 0.785     | -0.026 | 0.063     | 0.974     |
| 大学の有無                 | -0.136    | 0.058 *   | 0.873     | 0.172  | 0.125     | 1.188     | -0.101 | 0.128     | 0.904     | 0.161  | 0.170     | 1.174     |
| 仕事の有無                 |           |           |           |        |           |           |        |           |           |        |           |           |
| 定数                    | 0.341     | 0.150 *   | 1.406     |        |           |           |        |           |           |        |           |           |
| N                     | 10821     |           | 10819     |        |           | 10819     |        |           | 10414     |        |           | 10050     |
| カイ 2 乗                | 1593.132  |           | 1028.073  |        |           | 1028.073  |        |           | 1062.620  |        |           | 2048.722  |
| -2 対数尤度               | 13120.097 |           | 13682.986 |        |           | 13682.986 |        |           | 13039.886 |        |           | 11584.942 |
| Cox-Snell R2 乗        | 0.137     |           | 0.091     |        |           | 0.091     |        |           | 0.100     |        |           | 0.184     |
| Nagelkerke R2 乗       | 0.184     |           | 0.122     |        |           | 0.122     |        |           | 0.134     |        |           | 0.248     |

注) \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001



は1.47倍になる。しかし、所得を投入した場合は、子どもがいることの影響はなくなっている。他方、モデル1からモデル3では仕事をする事が、暮らし向きが苦しくなることを有意に小さくするが、所得、健康、サポートを同時に投入したモデル4では、その効果は有意ではない。

そこでIV-3では、就業者および雇用者の働き方を統制した場合に、所得、健康、ソーシャルサポートが暮らし向きに及ぼす効果がどのようになるのかを検証する。

### 3 就業者における暮らし向きの苦しさに関連する要因

表3は就業者および雇用者のサンプルに限定し、暮らし向きの苦しさと所得、主観的健康、ソーシャルサポートとの関連について、それぞれロジスティック回帰分析を行った結果である。個人属性に関して、就業者については自営か勤めかの違い、雇用者については正規・非正規の雇用形態の違いも統制して分析を行った。

就業者における暮らし向きを分析したモデル5

表3 就業者、雇用者の暮らし向きに関するロジスティック回帰分析の結果

|                            |                   | 就業者<br>モデル5 |           |           | 雇用者<br>モデル6 |           |           |       |
|----------------------------|-------------------|-------------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|-------|
|                            |                   | B           | 標準誤差      | Exp (B)   | B           | 標準誤差      | Exp (B)   |       |
| 等価世帯所得<br>(基準：第1十分位)       | 第2十分位             | 0.244       | 0.181     | 1.277     | 0.092       | 0.219     | 1.096     |       |
|                            | 第3十分位             | 0.446       | 0.177 *   | 1.562     | 0.410       | 0.211     | 1.507     |       |
|                            | 第4十分位             | 0.299       | 0.173     | 1.348     | 0.389       | 0.206     | 1.475     |       |
|                            | 第5十分位             | 0.163       | 0.167     | 1.177     | 0.263       | 0.199     | 1.301     |       |
|                            | 第6十分位             | -0.363      | 0.166 *   | 0.695     | -0.153      | 0.197     | 0.858     |       |
|                            | 第7十分位             | -0.418      | 0.167 *   | 0.658     | -0.359      | 0.197     | 0.698     |       |
|                            | 第8十分位             | -0.677      | 0.165 *** | 0.508     | -0.547      | 0.195 **  | 0.579     |       |
|                            | 第9十分位             | -0.949      | 0.165 *** | 0.387     | -0.895      | 0.196 *** | 0.409     |       |
|                            | 第10十分位            | -1.688      | 0.173 *** | 0.185     | -1.523      | 0.205 *** | 0.218     |       |
|                            | 主観的健康観<br>(基準：普通) | 良い          | -0.547    | 0.064 *** | 0.579       | -0.633    | 0.073 *** | 0.531 |
| まあ良い                       |                   | -0.234      | 0.065 *** | 0.791     | -0.295      | 0.074 *** | 0.745     |       |
| あまり良くない                    |                   | 0.661       | 0.094 *** | 1.936     | 0.754       | 0.109 *** | 2.125     |       |
| サポートなし<br>(基準：サポートあり)      | 良くない              | 0.717       | 0.273 **  | 2.048     | 0.624       | 0.330     | 1.867     |       |
|                            | 看病・介護             | 0.310       | 0.134 *   | 1.363     | 0.344       | 0.150 *   | 1.411     |       |
|                            | 高額な援助             | 0.906       | 0.073 *** | 2.474     | 0.831       | 0.082 *** | 2.295     |       |
|                            | 愚痴を聞く             | 0.049       | 0.187     | 1.050     | 0.103       | 0.210     | 1.109     |       |
| 性別 (基準：女性)                 | 男性                | 0.258       | 0.055 *** | 1.294     | 0.529       | 0.074 *** | 1.697     |       |
|                            | 年齢<br>(基準：20歳代)   | 30歳代        | 0.061     | 0.088     | 1.063       | 0.065     | 0.097     | 1.067 |
|                            |                   | 40歳代        | 0.218     | 0.090 *   | 1.243       | 0.224     | 0.101 *   | 1.251 |
|                            |                   | 50歳代        | 0.219     | 0.100 *   | 1.245       | 0.198     | 0.113     | 1.219 |
| 婚姻状態<br>(基準：有配偶)           | 未婚                | -0.494      | 0.080 *** | 0.610     | -0.531      | 0.091 *** | 0.588     |       |
|                            | 死別                | -0.314      | 0.273     | 0.730     | -0.454      | 0.345     | 0.635     |       |
|                            | 離別                | 0.276       | 0.119 *   | 1.318     | 0.354       | 0.137 **  | 1.424     |       |
| 子どものいる世帯<br>学歴<br>(基準：小中卒) | 子どもあり             | 0.083       | 0.065     | 1.086     | 0.096       | 0.075     | 1.101     |       |
|                            | 高校卒               | -0.322      | 0.121 **  | 0.725     | -0.295      | 0.156     | 0.745     |       |
|                            | 専門学校卒             | -0.379      | 0.133 **  | 0.685     | -0.362      | 0.169 *   | 0.697     |       |
|                            | 短大高専卒             | -0.466      | 0.140 *** | 0.627     | -0.449      | 0.175 *   | 0.638     |       |
| 就業状態<br>(基準：雇用者)           | 大学卒               | -0.701      | 0.126 *** | 0.496     | -0.667      | 0.161 *** | 0.513     |       |
|                            | 大学院卒              | -1.380      | 0.221 *** | 0.251     | -1.382      | 0.261 *** | 0.251     |       |
|                            | 自営業               | -0.005      | 0.083     | 0.995     |             |           |           |       |
|                            | 会社団体役員            | -0.214      | 0.095 *   | 0.808     |             |           |           |       |
| 雇用形態<br>(基準：正規職員)          | その他               | -0.021      | 0.165     | 0.979     |             |           |           |       |
|                            | パート               |             |           |           | 0.594       | 0.091 *** | 1.810     |       |
|                            | アルバイト             |             |           |           | 0.627       | 0.143 *** | 1.873     |       |
|                            | 派遣社員              |             |           |           | 0.592       | 0.198 **  | 1.808     |       |
| 定数                         | 契約社員              |             |           |           | 0.421       | 0.131 **  | 1.524     |       |
|                            | その他               |             |           |           | 0.023       | 0.329     | 1.023     |       |
|                            |                   | 0.285       | 0.215     | 1.330     | -0.118      | 0.266     | 0.889     |       |
| N                          |                   | 8166        |           | 6446      |             |           |           |       |
| カイ2乗                       |                   | 1633.104    |           | 1405.643  |             |           |           |       |
| -2 対数尤度                    |                   | 9371.049    |           | 7240.448  |             |           |           |       |
| Cox-Snell R2 乗             |                   | 0.181       |           | 0.196     |             |           |           |       |
| Nagelkerke R2 乗            |                   | 0.245       |           | 0.265     |             |           |           |       |

注) \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

では、不健康な者（主観的健康観が「あまり良くない」と「良くない」）は、「普通」である者と比べて、暮らし向きへの苦しさを感じるリスクがおよそ2倍高い。手段的サポートの欠如も生活困難感を高める効果があり、「看病や介護、子どもの世話」で頼れる人がいないと1.36倍、「高額のお金の援助」が期待できないと2.47倍になる。ただし情緒的サポートについては有意ではなく、係数も0に近い値であった。所得については、第5十分位まではオッズ比が1を超えているが、中・低所得層で有意なのは第3十分位の1.56倍のみである。第6十分位以上は、先の推定結果と同様に所得が高くなるほど有意にリスクは低くなる。雇用者を基準とすると、自営業やその他の就業状態にある者は、若干ではあるが生活困難感を持つ可能性が低い傾向がある。会社・団体役員の場合は、0.81倍有意にリスクが小さい。

モデル6では、等価世帯所得階級第8十分位以上の高所得層では、暮らし向きを苦しく感じるリスクが有意に低かった。しかし、中・低所得層では有意な違いが見られなかった。それに対して、主観的健康観が「あまり良くない」場合は2.13倍有意に暮らし向きが苦しくなる。ただし、「良くない」場合はオッズ比が1.87倍であるが、有意ではない。このモデルでもまた情緒的サポートは有意ではなく、対して手段的サポートの欠如による暮らし向きへの苦しさは「看病や介護、子どもの世話」で1.41倍、「高額のお金の援助」で2.30倍となった。雇用形態の違いについては、正規職員を基準とすると、暮らし向きが苦しいと感じるリスクは、「パート」で1.81倍、「アルバイト」で1.87倍、「派遣社員」では1.80倍、契約社員では1.52倍となっている。

なお、モデル5、モデル6の双方において、世帯内の20歳未満の子どもの有無は、オッズ比も1に近く、有意ではなくなっている。

## V 考察とまとめ

分析の結果から、暮らし向きへの苦しさには低所得、不健康、手段的サポートの欠如のいずれもが有意に関連していた。だが、これら

3つの変数を同時に分析したところ、とりわけ就業者や雇用者に限定したサンプルでは、中・低所得の効果は消え、健康が「あまり良くない」と手段的サポートの欠如が生活困難感のリスクを高めていることが示された。

通常の賃金プロファイルに基づけば年齢が上がると所得も多くなると推察されるが、白波瀬・竹内（2009）の指摘と同じく、本論文の分析結果でも20歳代に比べて所得が多いと思われる30歳代以上の世代のほうが、暮らし向きが苦しい。また、同じく離婚の効果も大きい。つまり、暮らし向きへの意識は、所得の大きさ以外の要素が大きく影響していることが改めて確認された。

所得以外の要素として、本論文は主観的健康観とソーシャルサポートに注目したが、不健康や「看病や看護、子どもの世話」および「高額のお金の援助」で頼れる人がいないという手段的サポートの欠如は、暮らし向きを不安定化するリスクを高める傾向がある。

稲葉（2007）によれば、ソーシャルサポートの理論上重要なのは、「サポートが実際に提供されること」よりも「サポートがいつでも利用可能であること」だとされている。「自分にはサポートがある」という認識ないし信頼感が、ストレスの影響力を弱めるのである。したがって、「頼れる人がいる」と感じられることによって、暮らし向きが「苦しい」という意識は緩和される可能性があることが、本論文の分析から示唆された。

将来への展望や現在の生活に関する不安が、健康に対する不安と関連し、生活に満足している者は健康にも不安を感じていないことは、三澤（2013）でも示されており、社会生活の観点から健康不安の湧出を検討する重要性が指摘されている。本論文から導かれた知見は、暮らし向きがその語義通りに「暮らしの経済状況、生活の様子」を表しているだけでなく、さらに生活上の不安感や満足感を反映していることを示唆している。

雇用者のみを対象に分析した結果からは、不健康や手段的サポートの欠如に加え、正規職員か非正規職員かの違いによっても、暮らし向きへの苦しさ異なることが明らかになった。非正規雇用な

ど不安定な条件の下で、さらに健康状態が悪くても働かなくてはならない現実に加えて、いざという時にサポートを受けられないことが、暮らし向きを苦しくしていることが推測される。勤労者の不安について分析した南雲・小熊(2011)の研究によると、男性非正規社員で失業不安を感じている割合が圧倒的に高いのは、非正規でも主たる生計支持者として働く者の割合が高いためであろうと指摘している。本論文は、その主張とも整合性のある結果を示したといえる。

以上のように本論文は、主観的健康観の悪さや、ソーシャルサポートの欠如のほうが、所得の多寡よりも暮らし向きの苦しさと大きく関連していることを、全国調査のデータを用いて示した。その一方で、例えば消費の水準や過去と比べた生活変化などの要因との関連については扱うことができなかった。暮らし向きが不安感や満足感などの心理的な状況を反映するならばなおさら、他人や過去の自分との比較に基づく評価がどのように関連しているのかについても解明する必要がある<sup>5)</sup>。その際には社会心理学で蓄積された知見も参考になるかもしれない。

さらに本論文は横断調査に基づく分析という制約もあり、暮らし向きと3つの変数との因果関係については確定的な結論を得るには至っていない。とりわけ主観的健康観とソーシャルサポートとの関連については多くの先行研究もあり、両者がいかにして直接的、間接的に「暮らし向き」に影響を及ぼしているのかについては、さらに分析を深めることが求められるだろう。

また本論文では、「暮らし向き」が「大変苦しい」と「やや苦しい」とを1つにまとめて分析を行ったが、生活困難者への施策を考える上では、2つの選択肢を識別して分析することでより有益な示唆が得られるかもしれない。生活困難を抱える者に公的な支援を行う際には、危機的な生活困難を抱える「大変苦しい」者から支援を行い、「やや苦しい」者には苦しさが悪化しないように予防することが重要となるだろう。その目的を果たすため、「やや苦しい」から「大変苦しい」への移行過程を明らかにすることも、今後の課題として残

されている。

## 謝 辞

本論文の執筆に際して、国立社会保障・人口問題研究所の西村幸満氏、泉田信行氏から大変有益な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。本論文に残るすべての誤りはすべて筆者のみの責任に帰するものである。

## 注

- 1) 三重野(2012)は、本来ならば分析に用いる変数として「個人収入や世帯収入が考えられるが、収入関係は欠損値が多く、信頼性にも疑問がある」(p.46)ので、経済階層を表す変数として「職業その他」(=就業状況や雇用形態など)を採用したと述べている。
- 2) 「生活意識に関するアンケート調査」には、1年前と比べた暮らし向きの変化に関する設問があり、直近の調査結果(第56回、2013年12月調査)では、「ゆとりが出てきた」は4.7%、「どちらとも言えない」が54.3%、「ゆとりがなくなってきた」が40.9%となっていた。
- 3) 2012年の「国民生活基礎調査」および「生活と支え合いに関する調査」は、東日本大震災の影響により、福島県については調査を実施していないため、当該地域に関するデータは含まれていない。
- 4) ここで分析対象は11,391人と記したが、「現在の暮らし向き」に無回答だった者236人が含まれているため、実際に分析に用いるサンプルは表1で示す通り11,155人となる。
- 5) 佐野(2009)は、「消費者の意識と行動調査」(旧・日経産業消費研究所実施)の結果をもとに、特に若年層において身近な友人・知人といった他者との比較で自分の暮らし向きを判断する傾向が見られることを指摘している。

## 参考文献

- 稲葉昭英(2007)「ソーシャル・サポート、ケア、社会関係資本」『福祉社会学研究』No.4, pp61-76。
- 岩佐一(2011)「高齢者のソーシャルサポート・ネットワーク評価尺度」『老年精神医学雑誌』Vol.22, No.6, pp.660-671。
- 金恵京・甲斐一郎・久田満・李誠國(2000)「農村在宅高齢者におけるソーシャルサポート授受と主観的幸福感」『老年社会科学』Vol.22, No.3, pp.395-404。
- 暮石渉(2011)「退職者における予期しない出来事が生活水準と暮らし向きに与える影響」『季刊社会保障研究』Vol.46, No.4, pp.368-381。
- 近藤克則(2007)『検証「健康格差社会」』医学書院。

- 国立社会保障・人口問題研究所 (2013) 『2012年社会保障・人口問題基本調査 生活と支え合いに関する調査 結果の概要』。
- 佐野美智子 (2008) 「経済的豊かさと暮らし向き満足度との関連：所得格差は幸福格差につながるのか」『季刊家計経済研究』 No.80, pp.55-63。
- 佐野美智子 (2009) 「若年層における所得格差が暮らし向き満足度に及ぼす影響」『生活経済学研究』 No.29, pp.1-15。
- 白波瀬佐和子・竹内俊子 (2009) 「人口高齢化と経済格差拡大・再考」『社会学評論』 Vol.60, No.2, pp.259-278。
- 杉澤秀博 (1993) 「高齢者における主観的幸福および受療に対する社会的支援の効果：日常生活動作能力の相違による比較」『日本公衆衛生雑誌』 Vol.40, No.3, pp.171-180。
- 武川正吾・白波瀬佐和子編 (2012) 『格差社会の福祉と意識』 東京大学出版会。
- 南雲智映・小熊栄 (2011) 「勤労者が抱える失業と生活の不安：『勤労者短観』10年間の分析」『日本労働研究雑誌』 No.612, pp.29-39。
- 野口裕二 (1991) 「高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定」『社会老年学』 No.34, pp.37-48。
- 濱島ちさと (1994) 「高齢者のクオリティオブライフ」『日本公衆衛生雑誌』 Vol.49, No.2, pp.533-542。
- 藤原佳典・小林江里香・深谷太郎・西真理子・齊藤雅茂・野中久美子・稲葉陽二・福島富士子・星旦二・新開省二 (2012) 「地域高齢者における年収および暮らし向きと心理的健康指標との関連」『老年精神医学雑誌』 Vol.23, No.2, pp.211-219。
- 坊迫吉倫・星旦二 (2010) 「都市在住高齢者における等価収入と幸福感・生活満足感・主観的健康観の構造分析」『社会医学研究』 Vol.27, No.2, pp.45-51。
- 三重野卓 (2012) 「人びとの暮らしとその将来見通し：生活意識の視点から」武川・白波瀬編, 第2章, pp.33-55。
- (1990) 『「生活の質」の意味』 白桃書房。
- 三澤仁平 (2013) 「将来への展望および現在の社会生活に関する不安がもたらす健康不安への影響」『応用社会学研究』 No.55, pp.127-139。
- 山田嘉子・杉澤秀博・杉原陽子・深谷太郎・中谷陽明 (2006) 「配偶者としての高齢者介護ストレス：性差への注目」『社会福祉学』 Vol.46, No.3, pp.16-27。
- 和気純子 (2007) 「高齢者をめぐるソーシャルサポートの動向と特性：全国調査 (2005年) のデータ分析を通して」『人文学報 (社会福祉学)』 No.23, pp.29-49。
- Marmot, M. & Wilkinson, R. (2005), *Social determinants of health*, 2nd ed., Oxford University Press.
- Neugarten B., Havighurst, R., & Tobin, S. (1961) "The measurement of life satisfaction", *Journal of Gerontology*, Vol.16, No.2, pp.134-143.
- Stiglitz, J. E., Sen, A., & Fitoussi, J. (2010) *Mismeasuring our lives: why GDP doesn't add up*, New Press (福島清彦訳 (2012) 『暮らしの質を測る：経済成長率を超える幸福度指標の提案』 金融財政事情研究会)
- WHO (World Health Organization) (2012), *Social determinants of health: Report by the Secretariat*. ([http://www.who.int/social\\_determinants/B\\_132\\_14-en.pdf](http://www.who.int/social_determinants/B_132_14-en.pdf))

(しらせ・ゆみか

国立社会保障・人口問題研究所  
社会保障応用分析研究部第3室長)